金色の処女

野村胡堂

本篇は銭形平次の最初の手柄話で、この事件で平次は有名になったのです。この頃の平次は独身でしたからお静はまだ女房になっていず、八五郎も現われてはおりません。

一

「平次、折入っての頼みだ。引き受けてくれるか」

「ヘエ――」

銭形の平次は、相手の真意を測りかねて、そっと顔を上げました。二十四、五の苦み走った好い男、藍微塵の狭い袷に膝小僧を押し隠して、弥造に馴れた手をソッと前にそろえます。

「一つ間違えば、御奉行朝倉石見守様は申すにおよばず、御老中方にとっても腹切り道具だ。押しつけがましいが平次、命を投げ出すつもりでやってみてはくれまいか」

と言うのは、南町奉行与力の筆頭笹野新三郎、奉行朝倉石見守の知恵嚢と言われたほどの人物ですが、不思議に高貴な人品骨柄です。

「頼むも頼まないもございません。先代からご恩になった旦那様の大事とあれば、平次の命なんざ物の数でもございません。どうぞご遠慮なくおっしゃってくださいまし」

敷居の中へいざり入る平次、それをさし招くように座布団を滑り落ちた新三郎は、

「上様には、また雑司ガ谷の御鷹狩を仰せだされた」

「エッ」

「先ごろ、雑司ガ谷御鷹狩の節の騒ぎは、お前も聞いたであろう」

「うすうすは存じております」

それは平次も聴き知っておりました。三代将軍家光公が、雑司ガ谷鬼子母神のあたりでお鷹を放たれた時、どこからともなく飛んで来た一本の征矢が、危うく家光公の肩先をかすめ、三つ葉葵の定紋を打った陣笠の裏金に滑って、眼前三歩のところに落ちたという話。

それッ――と立ちどころに手配しましたが、曲者の行方はさらにわかりません。

後で調べてみると、鷹の羽を矧いだ篦深の真矢で、白磨き二寸あまりの矢尻には、松前のアイヌが使うと言う『トリカブト』の毒が塗ってあったということです。

「その曲者も召捕らぬうちに、上様には再度雑司ガ谷の御鷹野を仰せだされた。御老中は申すにおよばず、お側の衆からもいろいろ諫言を申上げたが、上様日頃の御気性で、いったん仰せだされたうえは金輪際変替は遊ばされぬ。そこで御老中方から、朝倉石見守様へじきじきのお頼みで、是が非でも御鷹野の当日までに、上様を遠矢にかけた曲者を探しだせとのお言葉だ。なんとか良い工夫はあるまいか」

一代の才子笹野新三郎も、思案にあまって岡っ引風情の平次に縋りついたのです。

「よくおっしゃってくださいました。御用聞冥利、この平次が手いっぱいにお引き受け申しましょう。ついては旦那、私が聞きた

いと思うことを、みんな隠さずにおっしゃって頂けましょうか」

「それはいうまでもないことだ。なんなりと腑に落ちないことがあったら訊くがよい」

「ではお尋ねしますが、上様を雑司ガ谷のお鷹野に引きつけるのは、何にか深い仔細がございましょう。小鳥のいるのは雑司ガ谷ばかりじゃございません。目黒にも桐ガ谷にも千住にも、この秋はことのほか獲物が多いという評判でございます。それがどうしたわけで――」

「これこれ、だんだん声が高くなるではないか」

「ヘエ――、でもこれが判らなかった日には手のつけようがございません」

「話すよ――、うすうす世間でも知っていることだ――、雑司ガ谷の鷹野の帰り、上様には決って、大塚御薬園へお立ち寄りになる。あの中に新築した高田御殿で、一と椀の御薬湯を召上がるのが、きっとお楽しみだ」

「と申すと」

「世上の噂でも聞いたであろう。御薬園預りの本草家、峠宗寿軒の娘お小夜は、府内にも並ぶ者なしという美人だ」

「そうでございますってね、上様もまったくお安くねえ」

「コレコレ、何を申す」

「ヘエ――、だが、ありがとうございました。それだけ伺えば大方筋はわかります。仔細あって私もお小夜の顔ぐらいは存じておりますが、あの女はどうしてどうして一筋縄でいける雌じゃございません――、よろしゅうございます。乗るか反るか、平次の出世試し、命にかけてもやってみましょう」

平次の若々しい顔には感興（インスピレーション）にも似たものがサッと匂って、身分柄の隔（へだた）りも忘れたように、胸をトンと叩いてみせました。

「お鷹狩の日取りは明後日（あさって）だ。ぬかりはあるまいが、そのつもりで――。拙者には拙者の工夫がある。油断をすると、手柄比（くら）べになろうも知れぬぞ」

「へエ――」

二人は顔を見合せて、会心の微笑を交（かわ）しました。与力と岡っ引では、身分は霄壌（てんち）の違いですが、なにかしらこの二人には一脈相通ずる名人魂があったのです。

二

大塚御薬園、一名高田御薬園というのは、今の音羽の護国寺の境内にあったもので、一万八千坪の中に有名な薬師堂、神農堂（しんのうどう）をはじめ、将軍臨場（りんじょう）の時のために、高田御殿という壮麗なる御殿までできていました。

総檜（そうひのき）の破風（はふ）造り、青銅瓦（せいどうがわら）の錆（さび）も物々しく、数百千種の薬草霊草から発する香気は、馥郁（ふくいく）として音羽十町四方に匂ったといわれるくらい。幕府の御薬園の権威はたいしたもので、もとより岡っ引や御用聞などの近づける場所ではありません。

与力笹野新三郎の屋敷を飛び出した銭形平次、いきなり大塚へ飛んで来て、この薬臭い塀にヘバリつきましたが、場所が場所だけに、どう工面しても入り込む工夫がつかないのです。

まる半日、気のきかない空巣狙（あきすねら）いのようなことをしていた平次も、その日の昼ごろには、とうとうシビレをきらしてしまいまし

た。

「チェッ」

舌打ちを一つ、袂から取り出したのは、そのころ通用した永楽銭が一枚です。手の平へ載せて中指の爪と親指の腹で弾くと、チン――と鳴って、二三尺空中に飛び上がります。落ちて来るところを掌で受けると、これがそのまま銭占い。

「帰れっていうのか、よし」

銭を袂に落すと、そのまま塀を離れて、音羽の通りへまっすぐに踏み出しました。これが銭形平次という綽名の出たわけの一つ。もう一つ、平次には不思議な手練があって、むずかしい捕物に出会すと、二三間飛退って、腹巻から鍋銭を取り出し、それを曲者の面体目がけてパッとほうりつけます。薄くて、小さくて、しかもちょっと重い鍋銭ですから、不用意に投げられると、泥棒や乱暴者などは、キット面体をやられます、ひるむところをつけ入って捕る、このこつはまことに手に入ったもので、銭形の平次というと、年は若いが悪党仲間から鬼神のごとく恐れられたものです。

その平次が見限ったのですから、御薬園の塀の中の秘密は容易のことではありません。腹立ち紛れの弥造を拵えて、長い音羽の通りを、九丁目まで来ると、ハッと平次の足を止めたものがあります。目白坂の降口に、紺暖簾を深々とかけ連ねて、近ごろできながら、当時江戸中に響いた『唐花屋』という化粧品屋、なんの気もなく表へ出した金看板を読むと、一枚は『――おん薬園へちまの水――』次のは『――南蛮秘法、おん白粉――』そしてさらにもう一枚には、『――峠流秘薬色々――』とあります。

「これだッ」

平次は思わず顎を引きました。

三

「お静坊いるか」

「あら親分」

そのころ東西の両国に軒を並べた水茶屋の一つを覗いて、平次はこう声をかけました。

「よう、相変らず美しいネ。罪だぜ、お静坊」

「あら親分、そんなことを言うなら、私は嫌」

「どっこい、謝まった。逃げちゃいけねえ、今日は大まじめに頼みごとがあるんだ。静ちゃんは、近ごろ評判の音羽の唐花屋へ買物に行ったことはないか」

「いいえ、朋輩衆で唐花屋へ行かない人はないほどだけれど、私はまだ行ったことはありません」

「そうだろうねえ、お前ほどの容貌じゃ、へちまの水にも南蛮渡来の白粉にもおよぶめえ」

「あれ、親分さん」

なるほどこれは美しい容貌です。せいぜい十七八、血色の鮮やかな瓜実顔に、愛嬌がこぼるるばかり。襟のかかった木綿物に、赤前垂をこそしめておりますが、商売柄に似ず固いが評判で、枝から取り立ての果物のような清純な感じのする娘でした。

「実は少し無理な頼みだが、半日暇をもらって、唐花屋まで買物に行ってもらいたいんだが、どうだろうネ、静い坊」

「え、え、行って上げるワ」

何と言うわだかまりのない返事でしょう。

「そいつはありがてえ、それじゃ御意の変らぬうちに――」

岡っ引と水茶屋の娘ですが、どちらも水際立った美男美女で、二人の胸には、何時の間にやら淡い恋心が芽ぐんできたのでしょう。とにかく話の運びの早いことは大変です。

両国から小日向まで駕籠、そこからわざと歩いて、唐花屋の入口に着いたのはかれこれ酉刻近い刻限でした。髪形をすっかり堅気の娘風にしたお静の後姿――黄八丈の袷と緋鹿の子帯が、唐花屋の暖簾をくぐって見えなくなった時は、大日坂の下から遠く様子を見ていた銭形の平次も、さすがに眼の前がまっ暗になるような心持がしました。唐花屋がどうという、つきとめた疑いがあるわけではありませんが職業的第六感とでもいいましょうか、――このままお静を犠牲にするのではあるまいか――といった予感が、平次の頭をサッとかすめて去ったのです。

「へちまの水をくださいな」

お静は一向そんなことを構いません。物馴れた調子で日傘を畳みながら、店がまちへもう腰をおろしております。

「ヘエ、いらっしゃいまし。ちょうど今年採ったばかりの新しいのがございます。これ徳どん、そこからお入れ物を持って来てお眼にかけな」

美しい客と見ると、馴れているはずの店中も、なんとなくザワついて、二三人の番頭手代が、磁石に吸付けられる鉄片のように、左右から寄って参ります。

「それからアノ、白粉ももらって行きましょう」

「へエへエ」

「それにお紅も」

大束なことを言って、お静はソッと店中に眼を走らせました。近ごろ出来の店構えで何となく真新しい普請ですが、そのくせ妙に陰気で妙に手丈夫にできているのが、娘の繊弱な神経を圧迫します。

「お茶を召しあがってくださいまし」

若い丁稚が、店使いにしては贅沢過ぎる赤絵の茶碗に、これも店使いらしくない煎茶をくんで、そっとお静の傍にすすめました。

「有難うよ」

身扮に相応した堅気の娘なら、この茶は飲まなかったかもしれませんが、お静は水茶屋の女で、お茶を汲むことも汲ませることも馴れております。桃色珊瑚を並べたような美しい指でそっと受けて、馴れた様子で一と口、二た口。

「オヤ――？」

お茶にしては妙に甘い、そして香気が可怪しいと思いましたが、三口目にはきれいに飲んでしまいます。

それから口の小さい素焼の徳利へ、へちまの水を詰めさしたり、白粉と紅とを取揃えたり、お鳥目を出そうとして帯の間へ手をやった時は、さきほどから我慢していた恐ろしい眠気が急に襲って来て、性も他愛もなく美しい島田髷がガックリ前へ傾きました。

「徳どんは外を見張れ、お前は手を貸せ」

大番頭が立ち上がって指図をすると、馴れた様子で、バタバタと不思議な作業が始まります。

「へッ、こいつはまったく掘り出し物だ」

「シッ」

二人の若い手代に抱き上げられたお静は、死んだもののようになって、赤い裳と白い脛とが、ダラリと下にこぼれます。

音羽の通りはしばらく絶えて、大日坂の下には、宵暗に光る眼、銭形の平次はまったく気が気じゃありません。

四

この時はじめて平次は、近頃江戸中で評判になった美しい娘が、頻繁に行方不明になることに思い当りました――芝伊皿子の荒物屋の娘お夏、下谷竹町の酒屋の妹おえん、麻布笄町で御家人の娘お幸――、数えてみると、この秋になってからでも三人ほど姿を隠しております。それも選り抜きの美人ばかり、書置も何んにもないから、まるで神隠しに逢ったようなものですが、それが早くて三日目、遅くとも七日目には、二た目とは見られぬ惨殺死体となって、川の中、林の奥、どうかすると往来のまん中に捨ててあるという始末です。

南北町奉行は、配下の与力同心に命じ、江戸中の御用聞を総動員して、この悪鬼のような犯人を探させましたが、何としてもわかりません。犯人がわからないばかりでなく、なんの目的で選り抜きの美しい娘ばかり殺すのか、皆暮れ見当もつかないのです。そのうえ死体は、洗い落してはあるが、歴々と全身に金箔を置いた跡があります。

「これだこれだ」

銭形の平次は一人頷きながら、宵闇の中をすかして、唐花屋の

裏口から出て行く駕籠の後を追いました。その中にお静が入れてあることはもはや疑う余地はありません。

駕籠は無提灯のまま、音羽の裏通りをまっすぐに、今の護国寺、その頃の大塚御薬園の裏門へ、呑まれるように入ってしまいました。

「やっぱりそうだ」

平次はこのまま引き返して、笹野新三郎に報告したうえ、御薬園へ手を入れさせようかと思いましたが、御薬園の見識はたいしたもので、若年寄じきじきの指令を受けなければ、町奉行では手のつけようがありません。そんなことで暇どっているうちに、お静の命が絶たれては一大事。

「まずお静を助けよう」

後で考えると、それはたぶん盲目的になりかけていた、平次の恋心がさせた思案でしょう。前後の考えもなく木蔭の土塀に手がかかると、平次の身体は軽々と塀を越えて、闇の御薬園の中へポンと飛び込んでしまいました。

それから何刻たったか、どこをどう通ったかわかりません。一万八千坪の御薬園の中、茯苓、肉桂、枳殻、山査子、呉茱萸、川芎、知母、人参、茴香、天門冬、芥子、イモント、フナハラ、ジキタリス——幾百千種とも数知れぬ薬草の繁る中を、八幡知らずにさまよい歩いたすえ、わずかの灯を見つけて、真黒な建物の中へスルリと滑り込んでしまいました。

それはたぶん有名な高田御殿だったでしょう。とにかく、非常に宏壮な建物で、人目を忍ぶにはまことに好都合です。廊下から部屋へ、納戸へ、梯子段へと、人と灯を避けて拾っているうちに、

いつの間にやら平次は、天井裏の密閉した一室へ入り込んでおります。

ハッと思って出口を探しましたが、どんな仕掛があったか、四方一様に樫の厚板で、戸や窓は愚かなこと、蟻の這い出る隙間もあろうと思えません。

「チェッ、勝手にしやあがれ」

度胸を据えてドッカと坐ると、不思議なことに、床板のあっちこっちから、大きく小さく、下の大広間の灯が漏れております。

よく見ると、それはことごとくギヤーマンを張った穴で、この天井裏から、下の様子を覗くために出来たのでしょう。——これは後で見ると、ことごとく下の大広間の格天井に描かれた、天人の眼や、蝶々の羽の紋や、牡丹の蕊などであったということです。

五

最初平次の眼に入った光景は、広間の中央に祀られた、なんとも形容のしようのない醜悪怪奇を極めた魔像で、その前と両側には、まっ黒な蠟燭が十三本、赤い焔をあげてメラメラと燃えております。

魔像の前には蜥蜴の死骸、猫の脳味噌、半殺しの蛇といった不気味な供物が、足の高い三方にのせて供えられ、その供物のまん中に据えた白木の大俎板の上には、ピチピチした裸体が仰向に寝かされて、その側には磨き立てた出刃庖丁が、刃を下にしてズブリと板の上に突っ立っています。

「アッ」

さすがの平次も、思わず唇を噛みました。俎の上の赤ん坊は、泣きも叫びもせず、好い心持そうにニコニコしているのが、四方の陰惨な空気の中に、不思議な対照を描き出して、身の毛のよ立つような気味の悪い情景です。

突然、今まで聞いたこともないような、陰惨な合唱とともに、一隊の男女が、妖魔の行列のように広間へ入って来ました。いずれも真黒な覆面、その間から、眼ばかり光らして、覆面越しの読経の声も、なんとなく陰に籠ります。

続いて燃え立つような真紅の布をまとった四人の女が、一人の娘をつれて現われました。夢見るような足取りで、無抵抗に台の上に押し上げられたのを見ると、これぱかりは町娘の服装をしたお静の囚われの姿だったのです。

「あッ、とうとう」

あまりのことに平次は、もう少しで声を立てるところでした。人間の力でこの密室が押し破れるものだったら、どこかの羽目を踏み砕いても飛び出したであろうが、それとてもできないことです。

また、一としきり奇怪な読経が湧き起って、魔像とお静の四方を、黒装束の人間の輪が、クルクルと廻り始めました。

それからしばらく続いて、広間はもとの静寂に還ると、不意に、人間の輪はサッと散ります。見ると、台の上に立ったお静はいつの間にやら、黒装束の人間たちの手で、十七乙女の若々しい肌へ、ベタベタと金箔を置かれているところだったのです。お静は魂の抜けた人形のように、少し仰向きかげんに突っ立ったまま、なすがままに任せて身動きもしません。

やがて乙女の上半身に金箔を置き終ると、黒衣長身の長老とも見える男は、黒頭巾の覆面を取ってお静の前に近づきました。

「あッ」

平次はもう一度声を立てるところでした。その男というのは、地獄変相図から抜け出した、悪鬼のように恐ろしく映ったでしょう。

「――」

続いて覆面をとったのは、この薬園の預主（あずかりぬし）、峠宗寿軒（とうげそうじゅけん）です。半白の中老人で、立居振舞になんとなく物々しいところがあります。

二人は前後して進んで、金箔（きんぱく）を置いた乙女（おとめ）の肩へ唇を触れました。続く黒装束の五、六人も、ことごとく覆面を外（はず）して、同じように乙女の身体へ唇の雨を降らせます。

この冒涜的（ぼうとくてき）な行法（ぎょうほう）が、どんなに平次を怒らせたことでしょう。

©2017 萩 柚月

お静の浄らかさを救うために、どんなことをしても——とあせりましたが、この密室はどんな設計でできたものか、二刻あまり探し抜いても、どうしても入った場所がわかりません。

そのうちに、下の広間がまた賑かになりました。と見ると、焔のような赤い布をまとった、半裸体の四人の美女は、人面獣身の魔像と、金箔を置いたお静を中心にして、あらゆる狂態を尽して乱舞を始めたのです。

魔像の前の大香炉には、幾度も幾度も異香が投げ込まれました。天井裏でそれを嗅ぐと、平次の心持も、うつらうつら夢見るようになります。

幾度か醒めては、広間の様子を覗き、幾度か気を喪っては何刻となく深い眠りに陥ちました。——これではならぬと——満身の力を両の拳にこめ、両眼を見開いて気を励ましましたが、泥酔した人のように崩折れて、その努力も永くは続きません。

金色の処女——お静の上に加えられる、あらゆる辱かしめと、怪奇至極の大儀式が、断片的に平次の眼と耳に焼きつけられながら、そのまま遠い遠い過去の出来事のように、他愛もなく消えて行きます。

六

明くれば十月九日、三代将軍徳川家光は近臣十二名を従え、微行の姿で雑司ガ谷へ鷹狩に出かけました。十二人のうち四人は将軍と同じ装いをした近習連、四人は鷹匠、あとの四人は警衛の士で、微行とはいいながら、この時代にしては恐ろしく手軽で

す。もっともこれは家光自身の命令で、目障りになるような士卒は、間近に置かれなかったまでのこと、音羽から小日向、大塚へかけては、何千とも知れぬ警護の士で、蟻の這い出る隙間もなく固めております。

この日はことのほか不猟だったせいか、家光は恐ろしく不機嫌で、近習達とろくろく口もききません。鷹狩が済むと、待ち構えていたように音羽へ下って、大塚御薬園の高田御殿へお入りになります。

御薬園の門前に迎えたのは、峠宗寿軒、五十がらみの総髪で、もともと本草家で武士ではありませんが、役目ですから、麻裃を着けて将軍を高田御殿へ案内します。

奥の一間、贅を尽した調度の中に納まると、近習達も遠慮をして、将軍を存分にくつろがせなければなりません。高麗縁の青畳の中、脇息に凭れて、眼をやると、鳥の子に百草の譜を書いた唐紙、唐木に百虫の譜を透し彫にした欄間、玉を刻んだ引手や釘隠しまで、この部屋にはなんとなく、さり気ないうちに漂う一抹の怪奇さがあります。

この時、女の童に襖を引かせて、茶碗を目八分に捧げて入って来たのは、峠宗寿軒の娘お小夜です。曙色に松竹梅を総縫した小袖、町風に髪を結い上げた風情は、長局風俗に飽々した家光の眼には、どんなに美しいものに映ったでしょう。年の頃は二十二三、少しふけておりますが、そのかわり町家にも武家にもない、滴るような美しさがあります。

恐るる色もなく、家光の前に進んで、近々と茶碗を進め、二三歩退って、

「お薬湯を召し上がりませ」

わだかまりもなく言って、俯向加減に莞爾します。こんな無礼な仕打は、日頃の家光には見ようったって見られません。大名が廓通いに夢中になったように、将軍家光が雑司ガ谷の鷹狩に夢中になったのも無理のないことです。

「――」

家光は黙って茶碗を取り上げました。本草家峠宗寿軒の煎じた薬湯、別になんの薬というでもありませんが、神気を爽かにして、邪気を払う程度のもの、唇のところへ持って行くと、高価な薬の匂いがプーンとします。

七

天井裏に閉じこめられた銭形の平次、幾刻――いや幾日眠らされたかわかりません。フト眼を覚すと、四方はすっかり明るくなって、天井裏ながら埃の一つ一つも読めそうです。怪奇な舞踊を思い出して、嘔気を催すような不愉快な心持になりましたが、お静の安否が心もとないので、もう一度ギヤーマンの穴から覗くと、広間は広々と取り片づけられて、白日の光がいっぱいにさし込み、忌わしい物など影も形もありません。

思い直して出口を探すと、今度はわけもなくみつかりました。壁は同じような樫の厚板で張り詰めてありますから、一箇所だけ手摺れがして、出入口ということはすぐわかります。しばらく押したり叩いたりしてみると、どうした弾みか、いきなりスーッと開きます。たぶん扉の下の踏み板に仕掛があったのでしょう。

一足漲るような白日の光りの中へ飛び出しましたが、困ったことに、庭にも廊下にも、広間にも玄関にも、夥しい人間がたかっていて、天井裏から飛び出したままでは、大手を振って出て行くわけに行きません。

「あッ、いけねえ。今日は上様お鷹狩の日だ」

霞んだような平次の頭にも、これだけの記憶が蘇って来ました。今日までに毒矢の曲者を捉えるはずだったのが、天井裏に閉じこめられてすっかり予定が狂ってしまったのです。

「こいつはしまった」

平次は天井裏で地団駄を踏むばかりです。

それからまた何刻か経ちました。御殿の中の空気は遽に緊張して、

「上様のお着き」

という囁きが、隅々までも行わたります。

上様お着きというのは、お鷹野は無事だったという証拠にもなりますから、天井裏の平次もそれを聞いてホッとします。

「間違いがあれば、この御殿内だ。よし、それならば、まだ望みがある」

しばらく泥棒猫のように、天井から天井へ、梁から梁へと渡って歩いた平次、いつの間にやら、羽目からスルリと抜け出して、離れの廂の下に這い込んでしまいました。首を少し曲げると、一枚開け放った障子の中に、上段の高麗縁が見えて、豊かに坐った黒羽二重の膝も見えます。

「上様だッ」

平次はヒョイと首を引きました。と同時に小夜が捧げた薬湯の

茶碗が見えます。

やがて家光は薬湯を手に取り上げた様子、それと同時に平次の眼には、もう一つ動くものが映ります。それは障子の外に、物の隈のように踞まった総髪の中老人、霰小紋の裃を着て、折目正しく両手をついておりますが、前夜怪奇な行法を修した、この薬園の預主、峠宗寿軒に違いありません。

家光が茶碗を取り上げて、唇まで持って行くと、宗寿軒の唇が歪んで、障子を射通すような瞳が、キラリと光ります。

「あッ、毒湯だッ」

捕物の名人、銭形平次には、ほかの人にない第六感が働きます。前後の事情から考え合せてみると、家光の手に持っている茶碗の中に、正面な薬湯が入っているわけはありません。

笹野の旦那がくれぐれも頼んだのは、これだッ。

平次はいきなり廂から飛び出そうとしましたが、高が岡っ引、将軍様の前へ飛び出せるわけもなく、大きい声を出そうにも、その辺の物々しいたたずまいを見ると、うっかり騒ぎを大きくして、相手に棄鉢に出られると、かえって恐ろしいことになりそうです。それに毒湯と思うのは、平次の単なる疑いで、実は本当の薬湯を勧めているのかもわからないのです。

ハッと気がついて腹巻を探ると、折悪しく鍋銭はありませんが、小粒が二つ三つと、それに柄にもなく小判が一枚あります。その頃の小判は大変な値打で、岡っ引などにとっては一と身代ですが、一昨日笹野新三郎から用意のために手渡された金、将軍様の命に関ろうという場合ですから、物惜みなどをしている時ではありません。

いきなり小判を右手の拇指と食指との間に立てて、小口を唾で濡らすと、銭形の平次得意の投げ銭、山吹色の小判は風をきって、五、六間先の家光の手にある茶碗の糸底に発矢と当ります。薬湯は飛び散って、結構な座布団も畳も滅茶滅茶。

「――」

家光は動ずる風もなく、面をあげて小判の飛んで来た方を屹と見やります。

「あッ」

驚いたのはお小夜、起ち上がると、いそいそと近寄って、薬湯に濡れた家光の膝へ、身体と一緒に、総縫い松竹梅の小袖を、サッと掛けました。

八

「これ、何をする――」

あわてて居住いを直す家光の膝を追うように、お小夜は袖の上へ顔を伏せました。

次の瞬間には、

「贋者ッ」

と弾き上げられたように起ち上がります。

「ようやく気がついたか」

「エッ、口惜しい、お前は誰だえ」

飛び退く女の帯際を猿臂を延ばしてむんずと摑んだ偽家光。

「与力笹野新三郎、上様のござを拝借して、その方親娘の企らみを見破りに参ったのだ。神妙にしろ」

と、高い声ではありませんが、ツイ調子に乗って名乗りを上げてしまいました。

これが非常に悪かった――と言うのは、障子の外で、深怨の眼を光らせていた峠宗寿軒、娘の声にハッと驚いたところへ、続いて笹野新三郎の名乗りです。思わず起ち上がるのへ冠せて障子のうちから、

「父上ッ、露見――早く、早く、地雷火ッ」

と娘のお小夜が悲痛な声を絞ります。

「おッ、娘、さらばだぞッ」

ヒラリと縁側から飛び降りると、廂の上から銭形平次が、パッと飛びつくのと一緒でした。

「野郎ッ、どこへ失せやがる」

もとより捕物の名人、寸毫の隙もありませんが、困ったことに宗寿は思いのほかの剛力で、それに平次は、まる二日物を食わないうえ、廂から飛び降りる機みに足を挫いて、進退駈引自由になりません。

「エッ、面倒」

二人はそれでも負けず劣らず捻じ合いました。あまりに咄嗟の出来事で、遠ざけられた近習たちが、駆けつける暇もなかったのです。

そのうちにお小夜の帯がバラリと解けました。錦の厚板の一と抱ほどあるのが、笹野新三郎の手に残ると、お小夜は脱兎のごとく身を抜けて、

「父上、地雷火は私がッ」

「おお、娘頼むぞッ、あの犠牲も逃すなッ」

親娘は最後の言葉を交すと、総縫い松竹梅の小袖は、大鳥のようにサッと奥へ飛び込みます。

犠牲と聞いて平次は驚きました。捨鉢になった宗寿軒父子が、地雷火で高田御殿を吹き飛ばすとなると、あの可哀そうなお静の命は一たまりもありません。金箔を置いて一度は祭壇に載せた処女の身体は、いずれあの広間のどこかに隠してあるに相違ないでしょう。

「笹野の旦那、此奴を頼みます」

「お、心得た」

その内に遠慮して遠退いていた近習たちも、騒ぎを聞いて駆けつける様子。平次は猛然として突っかかって来る宗寿軒を、一つかわして芝生の上に叩きのめすと、身を退いてサッとお小夜の後を追いました。挫いた足首は、焼金を当てるように痛みますが、今はそんなことを言っている場合ではありません。

勝手を知った大広間の中へ入ると、プーンと鼻を衝く煙硝の匂い、地雷火の口火は早くも点けられたのでしょう。

今さら事の危急な勢いに、平次はゾッと総毛立ちましたが、お静を匿した場所はまるで見当がつきません。

「お前は銭形平次、もう駄目だよ。一緒に死ぬばかりだ」

呵々と気違いじみた笑いを突走らせるのは、黒髪も衣紋も滅茶滅茶に乱した妖婦お小夜、金泥に荒海を描いた大衝立の前に立ちはだかって、艶やかに邪しまな眼を輝かせます。

「やい、女、あの娘をどうした」

「知らない」

「いや、知っているはずだ、言えッ」

「言わない、――どうしても言わない。私たちをこんな破目に陥し込んだのはお前だろう。――その代りお前の名前を譫言に言っているあの娘は、この御殿と一緒に木葉微塵に砕け散るよ。好い気味だ、――あれはお前の情人だろう。知らなくってさ、――おお、もう口火は燃えきった。ホ、ホ、ホ、ホ」

「いや、俺はお静を助けてみせる」

「馬鹿なッ」

荒海の衝立、怒り狂う紺青の波頭を背にして、小袖の前を掻き乱したまま、必死の笑いに笑い狂う美女の物凄さ。物慣れた平次も、思わずタジタジと退りましたが、しだいに激しくなる煙硝の匂いに、もう一度気を取り直して、毒蛇の眼のごときお小夜の瞳を、精魂こめて凝っと見詰めました。

「解るまい、もう最後だ。それッ」

「いや、解った」

何を考えたか平次は、猛然としてお小夜の身体に飛びつきました。細腕を取って引退け、荒海の衝立をサッと前へ引き倒すと、その背後にあるのは『御薬草』と書いた御用の唐櫃、力任せに蓋をハネると、中から燦として金色無垢の処女の姿が現われます。

全身に金箔を置かれたお静は、半死半生のままこの中に入れられて、捨てるか殺されるかする最後の運命を待っていたのでした。

「あッ、それを助けては」

後ろから縋り付くお小夜を蹴返して、金色の処女を小脇に痛む足を引摺って外へ飛び出す平次、――それと同時に、

轟然――天地も崩るるような物音。

天に冲する火焔の中に、高田御殿は微塵に崩れ落ちてしまいま

した。

九

これは後でわかったことですが、峠宗寿軒の前身は、駿河大納言忠長の臣で、本草学の心得があるのを幸い、京都に行ってその道の蘊奥を窮め、身分を隠して大塚御薬園を預るまでに出世したのです。

主君忠長自殺の後は、なんとかして、家光に怨みを報じようと、高田御殿の中に祭壇を設けて、中世に流行った悪魔を祭神とする呪法を行ったのでした。その祭に夥しい犠牲を要するところから、腹心の者に命じて、音羽九丁目に唐花屋という小間物屋を出させ、江戸中の美女を釣り寄せては、そのうちでもすぐれた美人を誘拐かして犠牲にし、連夜ひそかに悪魔の呪法を修して将軍家光を調伏する計画だったのです。

それも埒が明かないとみて、近頃は毒矢を飛ばしたり、娘お小夜の美色を餌に、毒湯をすすめて一挙に怨を報じようとしましたが、奉行の朝倉石見守が老中に進言して、将軍家光に面差の似た与力笹野新三郎を替玉に使い、みごとにその裏を掻いて取って押えたのでした。

峠宗寿軒は詮議中に自殺してしまいましたが、娘のお小夜はそれっきりどこへ行ったかわかりません。

大塚御薬園は、その後まもなく取潰しになり、天和元年護国寺建立の敷地として召上げられたことは人の知るところです。

銭形の平次はこれだけの仕事をして、将軍の命を狙う怨敵を平

げましたが、笹野新三郎に約束したお鷹野以前に曲者を挙げることができなかったのと、事件の性質が性質なので、表向きはその手柄に酬いられませんでした。しかし、家光の胸に銭形平次の名が印象深く記憶されたことと、金色の処女――お静の愛を確り摑んだことだけで、若い平次は満足しきっておりました。

（編注）

本作品の表題は底本にはルビはありませんが、誤読を避けるため初出時にならってルビをふりました。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩　柚月

初出―「文藝春秋オール讀物號」昭和六年四月号　文藝春秋社

底本―「銭形平次捕物全集」第一巻　河出書房　昭和三十一年五月五日初版

編集・発行　銭形倶楽部